

「巻き込まれ親父の狙撃」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

前回のフェリー埠頭の一件（「巻き込まれ親父の突入」参照）以来、港町水上警察署と港町警察署の女性警官達とHY達が仲良くなり、港町水上警察署と港町警察署の女性警官達、港湾局の女子局員達の交流の場として女子会とカルチャースクールの集まりとして白山亭が使われるようになり、また裏の母屋の空き室をHMの看護師仲間と同じように夜勤前の待機場所や夜勤開けの仮眠場所とか、24時間風呂に入れると言う事で銭湯扱いされたりする事もあるが、皆節度を持って自ら風呂の清掃とかしてくれるので、HGはなにも言わなかった。ただ、使用料金は貰っていた。

それから、前回のフェリー埠頭の一件以来、白山亭の女給服を着て作戦に参加した者や定員オーバーで作戦に参加できなかった港町水上警察署と港町警察署の女性警官達は、白山亭の女給姿に皆憧れがあるので、休暇等の暇なときに白山亭の女給服を着て店を手伝ってくれている…ただ、お尻を触られたとかで、不届き者の腕に関節技かけたり、何故かエプロンのポケットに手錠を入れていて、いきなり掛けるとか…流石にこれは、勤務時間外だから辞めさせた（不届き者が大抵葛葉組の構成員だったり…笑）等…多少のゴタゴタがあったりするが、おかげで白山亭はジェントリの憩いの場として格式高く営業している。

●Y市銃砲試験場

Y市銃砲試験場…ここは、港町警察署の射撃場よりはるかに大きいシューティングレンジがあり、散弾銃・小銃・突撃銃・軽機関銃・重機関銃・擲弾筒等の射程が長い銃器を撃つ事が出来る。この施設以外では軍の施設が存在するが、民兵会社時代ならHG達も使用できるが、今や民間人なので、特別な伝手等がないと使用できない。

H G達は、ここで小銃の射撃訓練をしていた。

H Gは、エージェントの主な任務は要人警護であり、武装は拳銃で十分と考えていた。

しかし、先のフェリー埠頭の事件（「巻き込まれ親父の突入」参照）で、帝都特殊急襲部隊・T S A Tがフェリー埠頭に派遣される前に事件を解決してしまったが、この時に狙撃手の育成も必要と考え、H Y・I Y・T Yに小銃を撃たせて、その内の成績の良い者を狙撃手として育てようと考えた。

碓屋には、小銃は狩猟用のボルトアクションの物（B県領地の猟友会の請負で鳥獣駆除用途）しかないので、銃砲試験場の自動小銃を借りた。

成績は、H Y・T Y…I Yの順。但し、I Yは左利きなので、銃砲試験場備品の自動小銃が右利き用の物しかなく、射撃がし辛くまた照準器の調整に手間どった。

H Gが試しに左手で射撃姿勢を取ると、確かにエキシジョンポート（排莢口）が目の前にあり、射撃後の空莢莢が目の前に飛んでくるのは気分が悪い。レバー等の操作が全て小銃の左側にあるため、操作するには、左手をグリップから外す必要があり、右利きのH Y達に比べて的に狙いを付けたままそれらの操作が出来ないことがネックになっていると感じた。

H GはI Yを呼んだ。

「I Y」

「はい」

「お前さん、民兵会社時代（この頃のH Gは教育が主で訓練は別の人に任せていた）は、自動小銃はどうして撃っていたんだ？ F県領地の事件の時でお前を斥候に出した後（「巻き込まれ親父の撤退」参照）、お前の使用していた自動小銃を持ったが、あれは会社標準の右利き用だったか…」

とH Gが訊ねると、I Yは

「はい、私はF県領地に派遣直前にI F隊長の部隊に編入を希望しましたので、あの自動小

銃はI F隊長の部隊の備品です。私がS S隊長の部隊に居る頃は、後方支援部隊と言う事で、実戦や訓練時には拳銃を携行し、副機銃手（機関銃等に弾丸を給弾する時の補助や援護する人）でしたし」

と素直に答えた。

「…それでか、あの時俺の愛銃を渡して、お前が左利きだと、言われるまで忘れていたが、右利き用自動小銃を持っていたのか？」

「そうです」

「実戦でも拳銃を携行しての後方支援だとすると…お前、まだ人を相手に撃ったことないってことか…」

「はい、そうです」

「じゃ、この前のフェリー乗っ取りの時は？（「巻き込まれ親父の突入」参照）」

「はい…あの時は、私も犯人に対して銃を向けましたが、I F隊長始を始め、その部下の方々が撃ってしまい、I Mさんを確保した私と女性警察官の方達は撃ちませんでした」

I Yの返事にH Gは「（このまま人を撃った経験がなくて、この先エージェント業務が出るだろうか…どこで経験を積ませないか）」と、一抹の不安を感じた。

「お前、入社時の基礎訓練時の自動小銃の射撃訓練ではいい成績だったと記憶しているが、S S配下に配属後はともに自動小銃を撃つ訓練をしていなかったのか？」

「はい」

「会社には左利き用の自動小銃を配備していたよな…訓練で使ったろ？」

「S S隊長は後方部隊に数が少ない左利き用の自動小銃は配備できないと、上層部から言われたと言っていました」

I Yの言葉に「（また、あいつら（日和見保身内密主義の上層部）か…S Sも意外と苦労してるんだな）」と、H Gは思った。

「では、特別銃器携帯・使用許可証の受験時にはどの銃を使用したんだ？ここ（Y市銃砲試験場）の小銃と突撃銃使ったんだよね？」

「はい、あの時は、小銃は右用のボルトアクション銃ですが、問題ありませんでした。突撃銃は、ケースデフレクター（排莢反射板）がある突撃銃を使用し、射撃時にシューティンググラスをかけて、空莢莢が顔に飛んでこないことを祈ってました。ただ、右利き用に調整されてしまったので、試射の時に時間をかけました」

「…だよな、じゃ今日あの自動小銃を選んだのは？」

と、HGは言って、IYの使っているシューティングレンジに置いてある自動小銃を指した。「HY先輩、TY先輩と同じモノを使用して、どうなるのか試してみたくて…任務では、お二人の使用するモノを引き続き使うと思いましたので」

と言ってIYは俯いた。それを聞いたHGは、HYとTYが使用している自動小銃を見て、「成程ね…その考えは、俺はいいと思う。お前さんは3人の中で唯一左利きだ。下手に右利きに矯正する必要はないしね」

HGの言葉にIYは自分が責められていると言う事ではないことを理解して、HGを見上げた。

HGはIY本来の実力を確認したくて、射撃試験場のガンラックを端から見て行って、古いボルトアクションの小銃を持ち出した。

「IY、それはボルトアクションの単発小銃だが、左利き用に作られている。これでもう一度撃ってみろ」

「はい」

IYがHGから渡された小銃をシューティングレンジに持って行って、伏せ撃ちの構えで狙いをつける。初弾からの的の中心に当たる。

「やはり…IYは腕がいいなあ…ウチ（碓屋）に自動小銃を買おうと思っているが、IYの

腕がいいので左利き用と右利き用の二挺買わないといけないかあ―」

とH Gが腕組みして考えていると、I Yがシューティングレンジの的を持ってやってきた。

「准尉、全弾的中心に命中しました！」

と喜ぶI YにH Gは

「凄いいじゃないか！他の二人より成績が良い」

とH Gは素直に喜んだ。

「ありがとうございます」

TYに自分の撃った的を見せて喜んでいるI Yを見ながら、H Gが複雑な顔をしていると、

「准尉、どうしましたか？」

とH YがH Gを覗き込むように訊ねた。

「うん、ウチで今度自動小銃を買おうと思っているが、I Yが左利きなので、右利き用と二挺買う事になるので、お金のことを心配している」

「そうですね、I Yのあの腕を考えるとそうなりますね」

二人のまえではしゃいでいるI Yを見てH Yは言った。

「だろ？今の自動小銃は、右利き用と左利き用に組み替えられるのがあるけど、個人携行になるから、一度固定するとそうそう組み替える事無いし…」

「だったら、自動小銃ではなく、ボルトアクションのスナイパー用の小銃を買ったらどうです？あれなら、ボルト（遊底）とボルトガイドを交換する事で簡単に左利きに転用できますし」

「…成程」

「私達エージェントの仕事って、民兵会社時代と違って拳銃でも撃ちまくる事ないですし、ましてや自動小銃を使う事は…確かに前のフェリーみたいな時には、突撃銃や自動小銃や

短機関銃が欲しくなりますけど、そんなこといつも起こるとは思えません。だったら、当面は単発のボルトアクションの小銃でも十分なのでは？」

「そうだな…助言ありがとう。HY」

「えへへ」

そこに、20人位の団体が入って来た。一人の体格の良い男が射撃場を説明している所を見ると、見学者かなにからしい…HG達は団体の迷惑にならないように、射撃訓練を続けた。

●IT

射撃試験場の休憩室…

テーブルを囲んで、HG達が今日の訓練について話をしている所に、

「あれ、准尉と…えーと、あつ、HYじゃん」

と、さつき射撃場で団体を案内していた体格の良い男が声をかけてきた。HGとHYはその人物を見て

「IT!」「IT教官」

と同時に言った。

「やはり、そうでしたか…お久しぶりです。准尉、それとHYも」

「おう、IT久しぶり…元気そうだな」

「ITさん久しぶりです」

ITは、HG達のいた民兵会社にTTと同じく他の民兵会社からの転職組である。基本の戦闘能力は高いが、やはりTT同様戦術面の知識に乏しかったので、HGが教育した。

体術に優れていたのも、教導隊のHGの部下になり隊員の体術の訓練を行っていた。そのため、ついた渾名が“HGの代貸”…そのために日和見保身内密主義の上層部に目を付け

られ、社内評価が不当に悪く扱われたので、退職してしまった。また、H Yの体術の師匠でもある。

「准尉は、こちらで何を？ H Yは、一緒に？」

とI Tが不思議そうに訊ねると、

「俺はガンスミスの会社を興して、あとエージェント派遣も始めた。H Yをはじめこの娘達は、俺の会社の者だよ」

とH Gはテーブルに居るH Y達を指して答えた。

「会社ですか？」

そう言っって驚くI Tに

「そうだよ、お前も知っている顔が何人かいるだろ？ 皆民兵会社D Kで俺が教えた教え子達だ」

と自慢げにH GはH Y達を見回すと、I Tは

「…引き抜きですか？」

と訊ねた。H Gは呆れて、

「そーじゃない！ みなあいっら（日和見保身内密主義の上層部）の被害に遭ってやむなく辞めて俺の元に來たんだ」

と言うと、

「嗚呼…そうでしたか、自分も犠牲者ですから、理解できます」

とI Tは納得顔で頷いた。

H GはH Y達を紹介しようと、

「I T、この娘達で、多分一番端に座っている娘（I Y）は知らんだろうが、真ん中の娘は覚えてるか？」

とT Yを指した。

「T Yでしょう…体術の訓練で教えていましたから」

とI Tが笑って答えた。それを聞いてT Yは嬉しそうに、

「はい、覚えていただいて光栄です」

と言った。それを聞いてH Gは、

「T Yを覚えていたか…一番端の娘はI Yと言って、3年前に俺が会社を定年退職する前の年に入社した娘だ」

とI Yを紹介した。I YはI Tを知らない…なぜなら、I TはT Yの基礎訓練が終わると、民兵会社D Kを退職したからである。

I TはH Gが定年まで民兵会社D Kに居た事について、驚いたが、

「…准尉…定年退職まであの会社に居たのですか…それはある意味凄いですね。あー、でも

I F隊長が居たからでしょ…彼女さんだし…」

とI Tが冷やかして言うのと、H Gは

「俺とF子ちゃんは、飲み友達だけど、付き合っちゃいないよ」

「そーですかー、疑わしいですが」

H Gはあらぬことを詮索されてきたので、話題を変えるべく、

「今、お前さんは何をしているんだ？」

と真顔で訊ねると、I TもH Gの意図を組んで、I Fとの関係について、これ以上訊かないことにして、

「自分は、B県領地地警の機動隊の隊長をしています」

「へーえ、凄いな」

「実は准尉ですので、話しますけど…今度、B県領地の地警で特殊急襲部隊を創設すべく、この度自分がその編成の命を受けたので、隊員の候補者達とここを案内していました」

「そうか…B 県領地地警もようやく特殊急襲部隊を創設するのか」

「はい、准尉にこの話をするのは、B 県領地地警が特殊急襲部隊を創設するきっかけは、先日
のフェリー埠頭の事件でして…」

I T の言葉に H G と H Y 達はギクツツとした。

「それを解決したのは地元の港町水上警察署と港町警察署と我々が居た民兵会社 D K の I
F 隊長と言うじゃないですか」

と I T が言ったので、H G と H Y は平然を装い、I Y と T Y は安堵の表情をした。

「で、I F 隊長に率いられた突入隊は、Y 国際港商店街の喫茶店のウェイトレスの姿をして
いたそうで…白山亭と言う店の名前の…」

と I T が言ったので、H G は H Y 達の顔を見て、皆頷いたので

「…実は、白山亭のオーナーって俺なんだ…」

「マジッ！」

H G の言葉に I T が驚いた。

「白山亭は俺のひいお婆さんが開いた店で、俺が最近あとを継いだんだ…なので、F 子ちゃん
の作戦指揮所とウェイトレス…ウチじゃ女給って言ってるんだけど、制服を貸したり、商
店街で食事を提供したんだ…」

と H G はあくまで、自分が作戦をたてて、自ら指揮をとって事件を解決したとは、I F と港
町水上警察署と港町警察署の名誉のために黙っていた。

「では、さっき言っていたガンスミスとエージェント派遣の会社は？」

「それも、俺が経営している」

「へーえ、凄いですね…だったら、先日
のフェリー埠頭の事件の解決にも准尉が関わってもおかしくないと思います…」

と I T が訝し気に訊ねた。H G は I T がこれ以上詮索して来るのを嫌がり、手を上げて

「IT…そこまでしてくれ！」

と言うと、流石元「HGの代貸」と呼ばれたITは、HGの心中を察して、

「はい、そういう事にしておきます」

と答えた。

●ITの来店とめんどくせー

「いらつしやいませ…あ、IT先輩」

TYが白山亭に来店したITを出迎える。

「おう、TY。ホントにここで働いてんだな」

「はい、あそこのバーカウンターには、もっと驚く人が居ますよ」

と言って、TYはITをバーカウンターの席に案内する。バーカウンターにはTTが居た。

「おや、KTじゃねえか！」

「あらー、ITお久しぶりー…今は結婚してTTYよ」

ITとTTは民兵会社DKに在籍していた期間が前後はするが被っていて、共にHGの教育・訓練を受けたり、新入社員の教育・訓練にHYと共にHGの元で教えていた。なので旧知の仲である。

「あんたも、ここで働いてんだ」

「そうよ、准尉がパートで雇ってくれたの。ところでIT、今何してんの？」

「今はB県領地の警察地警の機動隊の隊長をしてるよ」

「そーなの、凄いわね」

「ところで、准尉は？」

「今の時間は、裏の別の建物でガンスミスの仕事してるわ。呼ぶ？」

「たのむ」

TTは内線電話を取り、HGにIT来店の旨を伝えた。

やがて身なりを正して、HGがバーカウンター横の通用口から入って来た。

「よう、ITいらっしやい」

「ここが、准尉の店なんですね…」

と言ってITは店内を見回した。

「何か飲むか？」

と言って、HGはメニューを出す。

「では、白山亭オリジナルコーヒーを…」

「はい、畏まりました」

と、TTが言って、コーヒー豆を電動ミルにかける。電動ミルで挽いたコーヒーをサイフォ
ンに入れる。それを見ながら、ITは

「TT…手際良いね」

と褒めると、TTは嬉しそうに

「ありがとう」

と答えた。

「…ところで、俺に何か用かね？」

「はい、実は折り入って准尉にお願いがありました…」

「金の無心以外なら、取り敢えず話を聞くけど」

「…相変わらずですね。お金の無心ではないので、話します」
とITは笑いながら話す。

「うむ」

「先月のY市銃砲試験場での話の続きですが、あれから候補者を20人から15人に絞りましたが、候補者の教育と訓練のメニューに行き詰りまして…各方面から教育・訓練マニュアルの提供を受けて、取りまとめようとしたのですが、上手く行かなくて…」

「へー、それは羨ましいな…一体どこから提供を受けた？」

「はい…TSAT（帝都特殊急襲部隊）、機動隊、シークレットサービス、正規陸軍特殊部隊、正規海軍海兵隊等の教育・訓練マニュアルを提供していただきました」

「TSATから教育・訓練マニュアルの提供を受けたのなら、それを使えばいいじゃないか」

「いや、うちの上層部はTSATと差別化を図りたいらしく、そのままTSATの教育・訓練マニュアルをそのまま使う事は駄目だと言い出しまして…」

「そうなの？差別化ねえ…帝都警察庁に対する対抗意識があるのかね？」

「…らしいです。残念ながら」

「どこに行っても、上役の無理強いは閉口するな」

とHGは言って民兵会社DKに居た頃を思い出した。

「そうですね…ですので、准尉のお力をお借りしたくて…」

「俺のねえ…教育・訓練のマニュアル作成か？」

「はい…できれば、上部の意向を反映して…」

「期間は？」

「作成に2か月、教育・訓練の実施に4か月の半年間…実施の4か月は出来れば官舎に泊込みで…」

「いくら出す？」

「毎月、〇×万皇園…もちろん税抜きで…」

「安いな…」

「スミマセン…予算の都合で…外部のコンサルタント会社はこの値段を聞いた途端、断ら

れ続けています」

「そうか…ならば、こちらの条件が飲めれば請け負ってもいいぜ」

「その条件とは？」

「ウチのエージェント達も、その教育・訓練に参加させる事。無論タダで」

「はい？」

「特殊急襲部隊の訓練なんて、こちらが望んでも受けることが出来ないしね。いい体験になる」

「…分かりました、その条件飲みましょう…お願いできますでしょうか？」

「めんどくせーが、いいだろう…」

「(あつ、出た！)」とITとTTは思った。

HGはTTに指示を出した。

「TT、今から2か月後の4か月間のシフトにウチのエージェント達を抜いたアルバイトのローテーションの作成をお願い。無理なら、週2日までなら昼の営業を休んでもいいぞ。

それから、夜のPub営業は半年間取りやめる」

「はい…直ちに」

●娘共の教育・訓練

ITが帰った後、HGが母屋に戻り、娘共を集めて話をしようと食堂に入ると、椅子の背もたれを前にして、居間のテレビの方を向いて、椅子に正座しているHYの姿を見かけた。

「(面白い格好して座っているな…)」と思って、HGが近付くと、HYはエプロンをしたまんまで、テレビのサスペンスドラマに熱中の余り、両手で握ったお玉杓子のお玉を口にして齧っていた。

「おい、H Y：お玉杓子は料理器具であって、食べ物じゃないぞ！」

とH Gが呆れて言う。「ピッ！」と言う奇声をあげてH Yが飛び上がった。

「じゅ…准尉…いつから」

「お前さんが面白い格好で椅子に座って、これまた面白い事をしているので…」

とH Gがからかうと、H Yはお玉杓子を慌てて後ろに隠して、

「やめてください」

と言つてバツの悪そうな顔をした。

「で、その格好だと今日の食事当番だと思うが…台所放り出して、テレビ視ていて大丈夫か？なにか火にかけっぱなし…なんて事はないのか？」

「はい…それは、大丈夫です。支度はもう済んでいます。後は温めるだけです」

H GはH Yの返事に安心をして、

「なら…いいが…スマンな、夢中になって居る所を邪魔して」

「はい…」

とH Yは返事をする、お玉杓子を握つてすぐにテレビに夢中になった。

H Yが夢中になっているサスペンスドラマは、恋人を人質の一人になっているビルを立て籠り犯に対する刑事のドラマを放送していた。H GはI Tから請け負った話を思い出し、何か参考に出ないかと、H Yの座っている椅子の後ろで、一緒になってテレビを覗いていた。やがて、ドラマがハッピーエンドになり、エンディングテーマが流れる。それまで熱中してドラマを覗いていたH Yが伸びをして、後ろを振り向くと、腕組みしたH Gが居たので、驚いて椅子から転げ落ちた。

「じゅ…准尉、まだ居たんですか？」

「お前さんが熱中して覗いていたドラマが、さっき来店したI Tからの依頼に役に立つかも

しれないと思って、俺も視ていた」

「そうでしたか…あのドラマ、ハラハラして手に汗握っていました」

「それは、いいがお玉杓子を齧るのはやめてくれ」

と言われ、また慌てて手に持ったお玉杓子を後ろに隠して、

「…はあい…」

と返事してH Yは項垂れた。H Gが、H Yがお玉杓子を齧っていたのをからかっていて、別に咎めてないことを察すると、H Yは

「…で、今I Tさんの名前が出ましたか、なにかありましたか？」

とH Gに訊ねた。

「察しがいいね…実はI Tから特殊急襲部隊を創設について依頼を受けたんだ」

「そうですか…で、准尉は引き受けたんですか？」

「うん。引き受けた。教育・訓練マニュアルの作成と訓練の実施をね…毎月、〇×万皇園、税抜きでね」

「…随分安く請け負いましたね」

とH Yが呆れて言うと、

「そう思うだろ？実は条件を出した」

「…条件って？」

「訓練にお前達娘共全員参加を条件にした。それも4か月の間」

「えっ、4か月間ですか？お店は…白山亭はどうするのですか？」

とH Yが驚いて訊ねると、

「今、T Tにお前達を抜いたアルバイトのローテーションの作成を頼んだ」

「それで、いつから訓練を？」

「俺が教育・訓練マニュアルの作成をこれから2か月でまとめるので、その後だね」

「2か月後ですか…」

「そう、訓練期間は4か月間、機動隊官舎に泊込みで行う」

「泊まり込みだと、夜のP u b営業が…」

「それは、半年間営業をやめる」

「…そんな、無茶を…」

と言って、H Yは心配になった。H Yが心配そうに言ったのに対して、H Gは毅然と

「いや、俺は半年間店を閉めても、お前達をI T達の特急襲撃部隊の訓練に参加させることは、今後の事を考えて絶対必要と考えている」

「わたし達の為ですか…」

「この機会…他のエージェント派遣会社では出来ない事だと思っている」

とH Gが言うと、H Yは納得して、

「成程…で、准尉が教官を？」

「そうだ」

と言って、H Gがニヤリとして答えると、H Yは嬉々として

「だったら、わたしは参加します。実戦を離れて長いブランクがありますから…また、准尉の教育・訓練を受けたいです」

「…積極的だね」

とH Gが笑いながら言うと、

「はい、他の娘達にまだ負けたくありませんので」

と言って、H Yは意気込んだ。

「そうか」

その後の夕食の席で、H GはI Tからの依頼と、4か月間の機動隊官舎に泊まり込みの訓

練について、S Kと娘共に話をした。

S KはH Gの話を「滅多に経験できない事だから行ってこい！」と賛同し、T YとI Yも参加の意思を示した。

●マニュアル作成と人選

H Gは、昼間はB警察地警の庁舎内の一室でI Tから渡されたT S A T、機動隊、シークレットサービス、正規陸軍特殊部隊、正規海軍海兵隊等の教育・訓練マニュアルを読み込み。夜は、白山亭母屋の自室でそれらを整理した。H Gにとっては、民兵会社時代に見ることが出来なかった、様々な教育・訓練マニュアルを見ることができなのが、今後の碇屋のエンジニア達への教育・訓練に生かせると思い、それらを見ながら学んでいた。

マニュアル作成作業を始めて一ヶ月後、B県領地警察地警の庁舎内で

「准尉、帝都との差別化については？」

とI Tに訊ねられた。H GはI Tが上層部から中間報告を求められていると察して、

「帝都に無いモノはなにかね？」

と「親父モード」で訊き返した。

「国際ターミナルとしての港湾施設…とかですか？特に帝都には海軍基地がありません」

「そうだよね。帝都には旅客ターミナルとしての国際港と空港はあるが、ここB県領地には旅客も貨物ターミナルとしての国際港と空港がある。また、海軍基地も帝都にはない。なので、こちらはT S A Tが市街地を対象にしているのに対して、港湾施設や船舶乗っ取りに対する対処も入れると差別化が可能だろう…でも、特殊急襲部隊だけじゃ対処しきれないので、Y海軍基地の正規海軍海兵隊との連携とかB県領地駐留正規陸軍部隊との連携も必要」

「成程、T S A Tが単独で対処する範囲の上に、こちらは港湾施設も加えた上で、正規海軍

と正規陸軍との連携により、我々が尖兵となる事ですか？」

「警察の縄張り意識の高さを考えると、嫌がるかもしれないが、正規海軍と正規陸軍の協力を得ることで、予算が少なくなる事をアピールすれば、上層部も認めるんじゃないかな…それがダメなら予算増やせと言う事だね」

「准尉…無茶な事を」

と言つて、ITは困った表情をした。

「今の県領地知事と警察地警のトップはいずれも海軍派の人だろ？少なくとも海兵隊の協力は仰げると思うぞ！海兵隊の協力が得られたら、当然正規陸軍も対抗して口を出してくる。それを逆手に取って利用してやればいい」

と言つて、HGは手元の海兵隊の教育。訓練マニュアルを手にとって言った。そして、

「B県領地の特殊急襲部隊の教育・訓練マニュアルは、TSATのモノに海兵隊のモノを捕捉すれば出来るよ。海兵隊には船舶襲撃とか臨検のマニュアルがあったから、それを応用すれば、船舶乗っ取り対応が出来る。陸軍の部分は俺が民兵会社時代に作成した教育・訓練マニュアルを合わせ込めばよい」

「あと、両軍との連携についてですね」

「そうだ。これはTSATのマニュアルにはない事だからね。B県領地の国際空港は空軍と共同で使用しているし、Y国際港もすぐ近くに海軍基地がある。帝都の空港は民間空港と空軍が専用に使用する輸送基地と戦略・防空基地に別れているし、TSATは民間空港での対処しかない。こっちは折角各港（空港と海港）に軍隊が居るんだ、協力してもらわなきゃ」

「それでは…ここ（B県領地特殊急襲部隊）の教育・訓練マニュアルは」

「お前が上層部に俺の構想を納得させてくれれば、すぐに取り掛かれるよ」

「ありがとうございます。准尉の構想を早速上層部に掛け合い了承を得てきます」

「それから、あと…」

「何ですか？」

「お前の部下となる人達に正規海軍の海兵隊や正規陸軍の特殊部隊の人は居るのかね？」

「いえ、どちらも居ません」

「なら、早急に追加候補者に正規陸軍と正規海軍…それも特殊部隊員と海兵隊員を追加した方がいいぞ、警察関係者だけだと、頭が固くなる」

「先程の連携の件ですね。難しそうですが、上層部に掛け合ってみます」

「よろしく頼む」

「はい」

I Tの話に上司は難色を示したが、県領地知事と警察地警のトップは概ね賛成した。ただし連携は海兵隊員についてのみ承認され、海兵隊から2人の候補者を入れる事になった。

I Tはその旨をH Gに伝えると

「そうかね…2名の海兵隊員を入れることが出来るのは上出来だ。それでは、この話をT S A Tのトップにマニュアル提供のお礼と共に伝えてごらん」

と言った。

「なぜですか？」

「T S A Tの部隊構成は正規陸軍の特殊部隊と帝都警察庁の機動隊とシークレットサービスから人員を選んで構成されている…正規陸軍としては？」

「当然面白くない…で、正規陸軍からも人を入れると、帝都警察庁から総務省に突き上げがあり、それがB地警に落ちてくると？」

「多分、そうなると思うよ。B県領地の特殊性から海軍抜きはあり得ないので、正規海軍を牽制する意味で正規陸軍の隊員を入れると言って来るから…多分2人以上入れるとね。あと、正規空軍も隊員を入れると言って来ると思う」

「そうすると、陸海空の3軍がいがみ合う恐れが…」

「お前さんの心配はわかるよ。それがお前さん上司の懸念そのものだからね。でも、B県領地の陸海空軍はお前さんの懸念を払拭する程に仲がいいよ」

「そうですか？」

「帝都に空港や港が出来る以前から、帝都の世界への玄関口を守ってきたんだ。その結束力は固いよ」

ITが上司に海兵隊の候補者についての報告をすると、今度はB県領地の正規陸軍特殊部隊から更に2名人を入れろと苦虫を噛み潰した顔で上司から言われた。ITはHGの言葉通りになったのに驚いたが、早速B県領地の正規陸軍特殊部隊からの人選に取り掛かった。

実際に、特殊急襲部隊の部隊に正規海軍海兵隊2名と正規陸軍特殊部隊2名と正規空軍空港守備隊2名を加えて、21名になったが、各軍共に良く知っている人を寄こしたらしく、なにも争いが無く却って積極的に部隊に関わってくれた。

HGは教育・訓練マニュアルを作成した時点で、ITならびに特殊急襲部隊の部隊員に、これからの部隊拡大と人員に対する教育を担ってもらうため、それを見せて、意見を求めた。その過程において、装備品について話合わせた。

●教育・訓練

開始2か月後に教育・訓練マニュアルと装備品について、承認が得られると、いよいよ教育・訓練の実践と言う事で、機動隊官舎に泊まり込んでの教育・訓練を開始した。

「泊まり込みで教育・訓練なんて、入社時以来だわ」

と機動隊官舎の玄関で荷物を降ろすH Yが感慨深く言うと、I Yは驚いて

「H Y先輩、先輩の頃の基礎訓練って泊まり込みだったんですか？」

「そーよ、半年間24時間准尉と正規陸軍の兵舎を借りて泊まり込み…徹底的に叩き込まれたわー」

「そうなんですか？私は、教育は会社のブリーフィングルームで、訓練は正規陸軍の演習場で行っていました。それも一年間通いで…」

「えー、そうなの？」

「わたしの頃は、教育中は通いで、訓練は正規陸軍の兵舎で泊まり込みだったわね。10か月でしたね」

とT Yが言った。

「年々、准尉のスタミナが持たなかったのかな…？」

とH Yが言うと、

「…そうかも知れませんね」

とI Yが応じた。

官舎の講堂でI Tを始め、特殊急襲部隊の部隊員とH G達との顔合わせが行われた。

「私は、B県領地特殊急襲部隊の隊長を拝命したI Tだ…こちらに居る方達は、この度特殊急襲部隊の部隊員を編成するにあたり、部隊編成と教育・訓練マニュアルの作成に協力していただいたY国際港にある碇屋社長H Gさんとその部下の方々だ」

「H Gです。今I T隊長から紹介にあった通り、特殊急襲部隊の部隊編成ならびに教育・訓練のマニュアルを作成しました。よろしく」

「H G社長には、これから4か月間の教育・訓練の教官をこの官舎で皆と寝食を共にしてい

ただ。H G社長…いやH G教官は、私が民兵会社に所属していた時の教導隊の教官として教えを受けた事がある。信任できる教官だ」

「『よろしく願います』」

「H G教官の横に居る女性達は、H G教官がやはり民兵会社時代に、私と同じく教えを受けた人達だ。今回アシスタントではなく、実際に皆に混じって教育・訓練を受けるので、そのつもりで…H G教官に近い方から、H Y、T Y、I Yだ」

「H Yです」

「T Yです」

「I Yです」

「『よろしく願います』」

各隊員の紹介が終わると、A ～ Cの7人3班に部隊編成が分けられた。それぞれの班にH Y、T Y、I Yが入った。

教育は機動隊官舎の講堂で行われ、H Gが教鞭をとり、B 県領地特殊急襲部隊とT S A Tの違いについてから、B 県領地特殊急襲部隊特有の船舶、航空機に対する対処。また、正規陸軍・正規海軍・正規空軍・機動隊・シークレットサービスそれぞれの任務とB 県領地特殊急襲部隊の任務の違いと、お互い協力する任務等の基礎的な事から、B 県領地特殊急襲部隊の任務おける、各現場における色々なフォーメンションの説明、次にそれに対する各隊員のポジションについて話をして、その役割の重要性と負傷者が出た場合の代わりをどうするとかのリスクについて徹底的に話合わせた。

また個人対個人、チーム対チーム、チーム対個人等の連携など、チームワークについて考えさせた。

また訓練は、基本訓練は機動隊官舎にある施設を利用し、狙撃や擲弾筒の発射訓練は正規陸軍演習場、また市街戦訓練と船舶を使用した訓練は正規海軍海兵隊の訓練施設、更に航空機を使った訓練は空軍基地施設をそれぞれ利用する事が出来た。これはひとえに特殊急襲部隊の隊員に正規陸海空軍からの要員が居た事による。それぞれの元居た隊員達が元居た組織に伝手を持っていた事による。

HGの教官ぶりは、特殊急襲部隊の隊員達には分かり易いと好評で、また碇屋の娘共は「これから私達のエージェント業務にこれらが行かされるんだな…」と熱心にHGの教育・訓練を受けていた。その結果、HYとIYのスナイパーとしての技能が向上し、HYとTYの現場指揮能力の基礎が向上した。

HGは、訓練の過程で各隊員の適性によって班分けを変えたり、フォーメーションを入れ替えたりして適材を配置していった。

それらの訓練を見ていて、ITはHGの目論見と手腕に舌を巻いた。

この頃の訓練では、市街戦や船舶内の訓練でも、施設の各所にランダムに配置した標的の的を撃つ事をしていた…

また、装備品も最初から充実しており、HG始め碇屋の娘共は羨ましく感じていたが、いずれ碇屋もそれらの装備をHGが買うだろうと信じて使いこなすことに集中した。

のちに、これ等の装備のメンテナンスを碇屋が請け負う事になるが、装備の備品台帳の備品番号を見て、「あつ、特殊急襲部隊の訓練で私が使った奴だ…」と当時を思い出して丁寧にメンテナンスしていた。

教育・訓練が終わりに近づくころ、特殊急襲部隊の隊員達の結束も強くなり、また碇屋の娘共の技能も向上した。

I Tの上司とB県領地知事と警察地警のトップ、更にB県領地の陸海空軍のトップに対して訓練風景の観閲が行われる事になった…これには碇屋の娘共は部外者として参加できない…というか、碇屋の娘共はI Tの個人的意思での参加許可なので、上司達には黙っていた。

●初陣

観閲は、機動隊官舎に隣接している運動場に仮設の街角を模した施設を置いて突入訓練を見せて、その後はY海軍基地に移動して訓練用船舶（廃艦除籍された旧式軍艦）を使用した艦船突入訓練を見せる予定になった。

3班7人構成の班に分かれての訓練（今までは、各班に碇屋の娘共一人ずつ加えた8人構成）をI Tの号令の下に開始された。

訓練を行っている最中に、I Tの上司の元にY市銀行本店に銀行強盗が入った旨の第一報が入った。

その知らせは直ちに、B県領地知事と警察地警のトップに伝わり、知事が「特殊急襲部隊は、直ちに訓練を中止して、Y市銀行本店に急行せよ」との命令が出された。

I Tにその命令が伝わると、I Tはためらいもなく、ハンドスピーカで、

「訓練中止！中止！直ちに出勤準備。繰り返し。訓練中止！直ちに出勤準備に取り掛かれ！」

その号令に、訓練中の各隊員は行動をやめ、装備を整える（主に弾丸の補給等）ため、官舎に戻った。

それを官舎の窓から見ていたH G達…H Gは3人に、

「装備を整え、官舎の玄関口に集合！かれ」

「は、は、は」

再び運動場に集合した特殊急襲部隊の隊員達はワゴン車に分乗すると、Y市銀行本店に向かった。それを各要人を乗せた車が後を追う。この時、官舎玄関から指揮車に乗り込むH G達がいた。

Y市銀行本店に特殊急襲部隊が到着すると、銀行本店前には既にパトカーと機動隊の装甲車両がバリケードを築くように止められていて、盾を構えて機動隊と警察官がそれぞれ銃を構えて待機していた。

I Tが指揮車から降りて、現場の捜査官と話をしようとしたら、特殊急襲部隊の後に付いてきた、警察地警のトップがいきなり割り込み、特殊急襲部隊の突入の算段を始めてしまった。

警察地警のトップは、発足したばかりの特殊急襲部隊の姿とその作戦を秘匿するために、現場の捜査官にマスコミを後退させることを命令した。その上で特殊急襲部隊を銀行付近に展開させることにした。マスコミが後退するまで、特殊急襲部隊はワゴン内で待機を命じられた。

H G達はすぐにワゴンから出て銀行前に展開するものと、意気込んでいたが、I Tから無線で『全員、その場で待機』と伝えられ、H Gは訝しく思った。

暗い表情で指揮車に戻ってきたI TにH Gは

「どうした？なにやらおかしな雰囲気になった様だが？」

「はい、警察地警のトップが割り込み、現場の指揮権が向こうに握られてしまいました…現在マスコミを下がらせています。その上でトップは我々に突入を無理強いする気になっています」

「…それは、厄介だな。無謀な突入は勘弁願いたいね」

とH Gが呆れて言うと、

「そうですね」

とI Tも同意した。

「ま、何か言われるまでは、こちらはこちらの流儀を通すか…向こうが何か言ってくる前にとつとと配置を決めよう」

とH Gはタブレット端末にY市銀行本店付近の地図を表示させると、

「ここと…ここ、それからこの各ビルの屋上に、狙撃手を配置しよう。突入班は、A班は正面、B班は裏、C班はこの通りに配置することでもいいかな？」

「准尉的確な判断、自分も同意見です。で、狙撃手は？」

「このこのビルにウチのH Y。このこのビルにウチのI Y…このビルにはC犯のN A…N AがいないC班にはウチのT Yが入る。狙撃手はこの位置で命令があるまで待機」

とH Gは指揮車内に居るH Y達に指示をした。それを聞いて

「はい」

とH Y達が頷いた。

C班のN Aが指揮車にきたタイミングでI YとH YはN Aと共に狙撃銃を持って配置のビルに散開し、T YはC班に入った。

その後で、ようやくマスコミを後退させた警察官からの報告で特殊急襲部隊の展開が命じられた。

指揮車の前に集まった特殊急襲部隊の隊員達は、指揮車の扉の中からI Tが各班の配置指示をした。最後に

「俺と、I Tは指揮車で指示を出す。各員は今までの訓練の成果を存分に発揮する事！」
とH Gが言うと、隊員達は

「ハイ！」

と返事をして、それぞれの配置場所に駆け出して行った。

● I Y 初めて人を撃つ

『こちら、H Y。配置につきました』

「こちら、I Y 配置につきました」

『こちら、N A 配置につきました』

I Y は指定されたビルの屋上に着くと、バイポッドを展開したボルトアクションのライフルを設置して構えた。

スコープにはY市銀行本店の窓の一つが見えるが、ブラインドを降ろしているので、犯人らしき姿は捉えていない。本来なら狙撃手の他に観測手と言う射撃管制の要員が必要になるのだが、発足したばかりで人手不足のため（碇屋のエージェント達を加えても3班8人である…）、この場合は、指揮官のI Tと作戦補佐のH Gの指揮に従う事で、一人で対処する事になっている。

一方、銀行正面では防護盾を構える機動隊隊員達の後ろで、警察地警のトップがたて籠っている犯人と人質解放の交渉を始めた。

（拡声器片手に「無駄な抵抗はやめて出てきなさい！お母さんが泣いてるぞ！」…とまでは流石に言わないけど（笑）。作者）

警察地警のトップの交渉に応じた犯人の要求は、『逃走用の車と帝都国際空港にC国行のチャーター機を用意する事』であった。

警察地警のトップはC国行のチャーター機なんか最初から用意する気がないので、準備に難癖をつけて時間稼ぎを始めた。

その間に、

『こちら、N Aです。配置のビルの屋上にB県領地知事と更にB県領地の陸海空軍のトップがいらしていますが、どうしますか？指示をお願いします』

との連絡が入った。それを聞いたH GとI T『うわー、なんでまた…』と頭を抱えた。

「准尉、どうします？」

とI Tに訊ねられ、H Gは即座に

「A班に居る副隊長のY TをN Aの配置に向かわせろ！I Tお前はY Tの代わりにA班に入れ」

「ハイ！Y T、聞こえるか？」

『はい、Y Tです』

「お偉いさんたちが、狙撃手のN Aの配置のビルの屋上に、それこそ高みの見物に来たそうだ」

『うわつ、それは面倒な事に…』

「だから、お前が対処してくれ！●△ビルの屋上。すぐ行け！自分はA班の指揮をとる」

『えー、行ってどうするんですか？』

「安全確保と言う名目で、N Aの集中力と任務の邪魔をさせるな。グズグズすんな！」

『ハイ』

犯人との粘り強い交渉の末、警察地警のトップは、店内の人質の客で老人と子供の開放に成功した。解放された人質からの情報で犯人は3人。全員目出し帽を被っているので人相は不明であるが、声の特徴と身長から全員男性である事が判明する。それから、拳銃を持った犯人は1人と刃物を持った犯人は2人…それを聞いたH G「警察地警のトップも意外とやるもんだ」と感心した。

警察地警のトップは、拳銃を持っているのが1人なら、わざわざ正面から特殊急襲部隊を強引に突入させる事も無いと判断し、また犯人射殺の命令を出すことも無いと考え、裏口に待機している特殊急襲部隊に裏口からの銀行内に突入の指示を出した。それを聞いたITは特殊急襲部隊B班に裏口からの銀行内に突入の命令を出した。B班は銀行裏口の鍵を開けるため、同行させた銀行行員に鍵を開けさせた。同時にC班の配置を変更して、銀行側面の横道に潜むように移動させた。

警察地警のトップは、逃走用の車を見せて犯人を銀行店外に誘き出すことにして、出てきた犯人の確保を特殊急襲部隊と機動隊で対処をする事にした。

銀行の入り口近くにわざと距離を離して逃走用に用意したワゴン車を止め、運転してきた警察官がエンジンをかけたまま、車を降りて機動隊の防護盾の後ろに回った。車のエンジンは犯人が乗り込んだタイミングで、遠隔操作によりエンジンをストップ出来る様にしていた。

強盗犯は、機動隊と警官達に下がる様に指示をした。警察地警のトップは、ゆっくり包囲網を下げる指示を出した。

やがて、銀行の入り口から人質の行員に拳銃を突き付けた強盗犯達が出てくる。ITは配置した各ビルの屋上に居る狙撃手達に確認をとる。

『各員、そこから狙撃は可能か?』

『こちら、HY。こちらからだ人質に当たるリスクが高い。IY、そちらならいけそう?』
『NAです。こちら人も人質に当たるリスクがあります』

「こちら、IY。こちらからは問題なしです」

IYのスコープに犯人を捕らえながら、応答をする。

『だったら、正面のIT隊長の命令に合わせて』

とHYの指示がIYのインカムに入る。

「はい」

銀行の入り口：拳銃を持った犯人に引っ張られた人質が転倒し、それにつられて犯人も体勢を崩した。犯人が地面に手をついた時に犯人は拳銃を落とした。

『今だ、撃て！』

ITの言葉がIYのレシーバーに入る。IYはライフルのスコープに犯人を捉えていたが、いざ引き金を引く段になり、今までの的ではなく、生身の人間に対して引き金を引くことに躊躇いを感じた。前のフェリー埠頭の事件でフェリーのバーラウンジで乗っ取り犯にIM達を庇って拳銃を向けた事があったが、その時は必死だったし、結局乗っ取り犯を撃つたのはIF達民兵会社の社員達で、IYは撃つ事はなかった（「巻き込まれ親父の突入」参照）。人を撃った事の無い不安がIYの脳裡をかすめ、「（もし、犯人ではなく、人質に当たったら…）」と思うと、次第に息が荒くなり、引き金を引くことを躊躇っていた。

『IY！何やってんの！！』

HYの怒声がインカムに入り、IYを現実に戻す。まだ躊躇っているIYにHGが『お前が撃たないと人質は殺されるぞ。その方が犯人を撃つより、ずっと重い後悔を引きずり続ける事になるぞ』

と言った。その言葉にIYはハッとして「（今人質を助けられるのは、私だけなんだ…）」と考え、改めて犯人をスコープに捉えようと、呼吸を整え引き金を引いた。

IYの撃った弾丸は犯人が銃を拾おうとした腕に命中した。弾丸命中の衝撃でもんどりうって倒れる犯人に、

『突貫！かれ！』

とITの号令がIYのレシーバーに入り、IYがライフルのスコープから目を外すと、眼下に犯人に対して向かっていくIT隊長とTY達の姿が見えた。

●HYとIYが喧嘩をする

指揮車内で、IT達が犯人に向かって行くのを見たHGは、指揮車から出て一人IYの配置場所に向かった。

IYの配置場所であるビルの屋上に上がると、銀行の方を向いてライフルを抱えたまま座り込んでいるIYの姿を見つけた。よく見るとIYは小刻みに震えていた。

「…IY」

HGが呼びかけても、IYは反応しなかった。HGは最初IYの左耳の難聴のせいかと思ったが、左耳の補聴器は外れていなかった…どうやら、人を撃った恐怖で委縮しているらしい…

HGはIYの右側に回り込むように近づき、再び

「IY」

と呼んだ。HGの声を聞いたIYはビクツと一瞬飛び上がるような反応をして、HGの方に顔だけ向けた。その顔は怯え切った子狐の様な表情になっていた。

「IY…」

HGはIYの傍らに跪き、今度は優しく呼ぶと、IYは静かに抱えていたライフルを放り出して、HGに抱き着いた。

HGはIYを抱きとめ、頭を撫でながら

「よくやってれた…」

とHGが言うと、IYが泣き出した。「(かなり、緊張したんだ…)」とHGが思っている

と、息を切らしてH YがH G達の居るビルの屋上に上がってきて、ツカツカとI Yの元に近寄ると、I Yの襟首を捕まえて、H Gから無理矢理引きはがし、いきなりI Yの頬を平手打ちした。

驚くH G…ぶたれた頬を抑えH Yを睨みつけるI Y…H YはI Yの胸倉を掴むと

「あなた！なにやってたの？もしタイミングが遅かったら、人質は殺されてたわよ！…あなた今まで人を撃った事無いの？それでよく民兵会社に居られたモノね！」

と捲くし立てた。I YはH Yの言葉になすすべなく黙っていた。

H Gは「H YはI Yが今まで人を撃った事が無いのを知らないんだ…」と思って、二人の間を取り成そうとしたが、ここは敢えて黙っている事にした。

H Yに胸倉を掴まれて揺すられているI Yが

「わっ、私は民兵会社時代から今まで人に銃を向けた事はありませんが、撃った事はありません…フェリー埠頭の時でも私は銃を乗っ取り犯に向けましたが、引き金は怖くて引けませんでした…人相手に引き金を引いたのは今回が初めてです」

とH Yの目を真っ直ぐに見て言うと、H YはI Yを突き放し、

「そんなんで、よく准尉に弟子入りしたわね！…准尉に弟子入りして碓屋のエージェントになったからには、こう言う事がこの後いくらでも起こるのよ！それを覚悟しなさい！…それとも、准尉に弟子入りしても、エージェントになる覚悟は無いと言う積もり？…だったら、今すぐ准尉の弟子をやめて頂戴！」

と、H Yは凄いい剣幕でI Yを詰る。それを聞いたI Yはムキになり、

「…そっ、それは…私は、誰かさんと違い、自ら准尉に弟子入りを自ら志願しました。その覚悟の中に人を撃つ度胸がまだなかっただけです！」

「このー、誰かさんってわたしの事？確かにわたしは、あんたが准尉に弟子入りを言い出したから、あなたの事を心配してついてきたけど、准尉に弟子入りしたのはわたしの意思でも

あるのよ！わたしも准尉に色々教えて貰いたいのと、准尉の役に立ちたいと思って、いまここに居るの！！」

と言い合いながら取っ組み合いの喧嘩を始めた。それ見たHGは「ま、気の済むまでやらせるか…」と思い、ライフル銃を回収して静観を決めた。

やがて、両者疲れてビルの屋上にそれぞれ大の字になって横たわった。HGは「やれやれ…終わったか」と二人を見ると、HYとIYはお互いソップを向いていた。

二人を見てHGは

「…やはり、対人相手の射撃訓練が必要か…」

と呆れたように言くと、

「『対人相手の射撃訓練？』」

HYとIYがHGの言葉に驚いた。二人はHGが実際に人に対して実弾を撃つことを想像した。

「…二人とも何考えているか、なんとなく分るが…俺が言った訓練はペイント弾を使用した、対抗戦の事を言っているんだぞ」

「『アッ…』」

HGは官舎に帰ると、訓練のマニュアルにペイント弾を使用した模擬戦について加筆した。

やはり、訓練施設内に設置した標的より、実際に動く標的に対して撃つ事をしないと訓練にならない…HGも初陣では人と言うより人の乗った戦車を大砲で撃破したのが最初で、以後幾度かの戦場で敵に対して銃の引き金を引くことで、経験を積んでいったのを思い出

した。

●機動隊官舎の風呂場

機動隊官舎に戻り、反省会を行った後隊員達は解散し、H Y達はB S A TのN A達女性隊員と風呂に入った。

「いたた…傷に染みる―」

と悲鳴を上げるH Yの横に黙って傷にお湯が染みる痛みに耐えているI Yが居た。

事件現場で撤収前に指揮車の前に集まった時、H Gの前で顔が腫れているH YとI Yを見た隊員達は皆驚いた。

一体、何があったのかと皆ヒソヒソと話をしていたが、H Gが「狙撃のタイミングで口論になり、喧嘩をした」と言っ、その場を収めた。

でも、女性同士が顔を殴り合うなんて事は余程の事なので、B S A Tの女性隊員達は皆H YとI Yと一緒に風呂場に来ていた。（特殊急襲部隊の隊員は、突入隊はボディーアーマーとヘルメットを着用。狙撃手はボディーアーマーとヘルメットは重いので脱いで日差し避けにキャップを被る。作者注）

「一体、何があったの？ 准尉は二人が狙撃のタイミングで喧嘩になったと言ってたけど」
皆を代表してT Yが訊ねる。

「この娘（I Y）がなかなか撃たなかったの、喝を入れたのよ」
とH Yがソップを向いて言った。それに対してI Yは

「…はい、H Y先輩の仰る通りです…それから、私に『准尉の弟子を辞めろ！』とも言われましたので、喧嘩になりました」

「あなた…まだ根に持ってるの？」

H YがI Yに向き直って言うと、

「はい、私の落ち度は認めますが、准尉の弟子を辞めろと言う暴言は認めません」

とI Yはシレっと言い放った。H Yは持ち前の頑固さから、カチンときて

「わたしがF県領地の事件の後にあんたが准尉に弟子入りした度胸が、わたしには無かったと言ったわね！」

「はい、そうです」

この場でまた喧嘩になりそうになったので、T Yが

「…まあまあ…二人とも落ち着いて」

と言って二人をなだめた。

「二人は、准尉の所に自らの意思で押しかけて弟子になったんでしょ。わたしはT T先輩の紹介で弟子になったんだから、准尉に対する敬愛と尊敬の念は、わたしより遥かに強い事は十分承知してる。でも、その二人が争ったら、准尉は悲しむわよ」

とT Yが諭すように言うと、

「…」

二人とも黙り込んでしまった。

「そんな関係なの？あなた達…H G教官の会社の娘と言う事は初日の自己紹介で聞いたけど、単純に雇われている訳じゃないのね…だから、H G教官の厳しい教育・訓練に文句を言わず自ら進んで参加していたのね」

とN Aが横から口を出す。

「はい、そうです。わたし達はH G教官…いえ、准尉の弟子です」

とH Yが申し訳なさそうに答えた。

「…なんか羨ましいわ…経営者と社員の関係ではなくて、師匠と弟子と言うのが…それって、お互い信頼し合っているから成り立つじゃない」

とN Aが3人を励ますように言うと、H Y達はお互い顔を見合わせて、

「…そうですね、3人供弟子になった経緯は色々ありますが、私達は皆准尉を信頼して、また准尉も私達を信頼してくれています」

とI Yが答えた。

「それなら、3人供お互い信頼しあっているんでしょう？だったら、喧嘩しないで」

「[[はっ]]」

H YとI YはN Aの仲裁で喧嘩をやめた。

●B S A T発足

特殊急襲部隊に対するB県領地知事と警察地警のトップ、更にB県領地の陸海空軍のトップに対して訓練風景の観閲は、急遽Y市銀行本店の強盗犯の逮捕と言う初陣になり、結果、凶器を持った犯人の逮捕と言う事で評価を得た。特殊急襲部隊は正式にB県領地特殊急襲部隊“B S A T (B県領地 Special Assault Team)”として承認された。

「准尉、これで特殊急襲部隊は、B S A Tと名称が決まり、正式に発足する事が出来ました。ありがとうございます」

「いや、なに…こちら色々な収穫があった。教育・訓練マニュアルの作成に、こちらも見たくても見れない正規陸軍特殊部隊の訓練マニュアルやT S A Tの訓練マニュアルを見ることが出来たし、作成したマニュアルに基づいて教育・訓練をして、ウチの娘達の技能が上がったし、新しい装備品を使わせてもらったので、こちらの業務で何を追加装備すれば良いのかも知る事が出来たので、いい経験を積みかせてもらって感謝している」

「相変わらず、ちゃっかりしてますなあ…」

とI Tが呆れて言うと、

「それだけじゃないぞ！正規陸海空軍に伝手が出来た」

とH Gがシレっと言うと、

「えっ…えげつない…」

と言って、I Tが絶句した。

数日後、機動隊官舎講堂で、正式なB S A Tの発足式と第一期教育・訓練終了の会が行われた。

その場で挨拶したI Tは最後にH Gを壇上に招き、

「准尉、今までありがとうございます」

と言って、I TはH Gに頭を下げる。B S A T隊員達も一斉に「H G教官ありがとうございます
いました」「と頭を下げる。

「今回の教育・訓練では、これから新しく入る隊員に対する教育係としても鍛えたつもりだ
…こちらもいい経験をさせてもらった。ありがとう」

「今度、訓練施設を使って、模擬戦をしませんか？いつでも受けて立ちますよ」

とI Tが挑戦的に言うと、H Gは笑って。

「いいねー、ペイント弾を使用した訓練は、あの事件後に追加したから、まだ試していない
からな」

と応じ、他の隊員達も喜んだ。

会が終わり、H GはH Y達に

「さて、お前達。白山亭でT Tが首を長くして待っているから、帰るぞ」

「「はい！」」

「T T先輩、首じゃなくて背が高くなっていたりして…」

とT Yが言うと、H Gが

「それは、T Tに言うなよ！本人背の高さを気にしてるから…」

「はーい」

「「H G教官・H Y・T Y・I Y、またねー、今度白山亭に遊びにいくからねー」」

とN Aをはじめ、B S A T隊員達が機動隊官舎の門まで見送ってくれた。

「みなさーん、ありがとうございました。白山亭に遊びに来てねー」

とH Yが手を振って答えた。

●白山亭母屋

「4 か月振りの我が家だー！」

と言って、H Yは自室に荷物を投げ出すと、畳に寝転んだ。I Yも、部屋に荷物を置くと、畳に横になった。

部屋の仕切りの襖を開けて、T Yが顔を出す。H Yが横になっているのを見て呆れて

「H Y先輩…もう横になって…」

「いいじゃない。我が家なんだから」

「そうですね。わたしもそっちで横になっていいですか？」

「いいわよ、おいで」

T YもH Y達の部屋に入って、畳に横になる。

「終わったわね…厳しい訓練」

とH Yがしみじみ言うと、I Yが

「そうですね」

と応じる。

「疲れちゃった」

「H Y先輩、お歳ですから…」

「あー、T Y言ったなー」

「あの一、H Y先輩」

「なに？」

「准尉はH Y先輩を碓屋のナンバー1と言ってますよね…わたしはどのみちナンバー3ですから、実力も弟子入り順も…機動隊官舎ではわたし達の順位って、年齢順にしてみましたけど、これから弟子入り順にするのがいいのかと…」

「ふーん、T Yはそう思ってるんだ」

「はい、もちろん呼び方は、年長者順でいいと思います。ただ、官舎内では皆興味をもたれて聞かれたので、説明するとややこしくなって…」

「私は、ナンバー1はH Y先輩でいいと思います」

とI Yが言うと、

「どうして？」

とT Yが訊ねる。I Yは

「H Y先輩は、准尉と一緒に居た期間は、途中ブランクがありますが、この3人の中で一番長く、また准尉の教えを長く受けています。それを考えると、やはり碓屋のナンバー1と名乗ってもおかしくないです」

「それを言ったら、I Yあんた准尉と一緒に居た期間は基礎訓練のたった1年じゃない。わたしは。基礎訓練の10か月と、その後の准尉の指揮下での作戦に数回参加しているし」

TYとIYの言い合いに、HYが割って入り、

「ハイハイ、そんな争い空しいからやめよう！誰がナンバー1とかナンバー3とかは准尉が決めることでいいでしょ！」

「そうですね。すみませんでした」

「はい、私も反省します」

「でも、実力はいつ入れ替わるか分からないから、その時の評価は准尉任せね」

「そうですね。私は、実力はお二人に負けない様に頑張ります」

「言ったな、IYわたしも負けないよ」

「わたしも…負けたくないわね」

「なんですか？HY先輩、その間は」

「…とつ、歳に負ける…」

「アハハ」

と笑うTYとIYにHYは怒って

「笑うな！」

「でも、IYあんたここに来て変わったわね」

とTYがしみじみ言うと、

「そうですか？」

「最初、あんたに会ったのは、F県領地の事件の直前だったけど、やる気のないものすごく暗い娘…と思ったけど、准尉がO県領地に渡って再びF県領地に戻った時にあんた命令無視して勝手について来て…その前から、性格が代わってテキパキと行動するようになって…挙句に会社辞めて准尉に弟子入りして…これは後から知ったけど」

「そうですか？」

「それが、わたしが准尉に弟子入りするのにT T先輩に連れられて、ここに来た時にはすっかり明るくなって…まあ」

「あー、そうですね。私は准尉に出会って人生が変わったのは否定しません。それで性格も変わりましたね」

「そーなの？」

とH Yが訊ねる。T Yは

「はい、こいつ（I Y）は、ほんつとうに、暗くて棘のある言い方しかしい奴で…今でも時々棘のある事を言いますけど…」

「T Y先輩やめてください」

「でも、准尉はこいつの事よく覚えていて、F県領地の事件の時はこいつを気にかけていたようで…」

「そう言えば、准尉はI Yに何かを見出していたのかもね…だから、弟子入りを言いだしても、それこそ最初は無下に断っていたけど、結局弟子入りを許したわね」

「H Y先輩まで…」

「結局、准尉は教え子の末娘は可愛いのね…長女は辛いね」

「H Y先輩、T Y先輩…なにかと至らない末娘ですが、これからよろしくお願いします」

「なっ…ナニを改まって…、わたしと喧嘩した時変な所ぶつけたの？」

と言ったH YにT Yが笑い出した。

「アハハ！」

「笑わないでください！」

●T YのI Yの思い出

帝都民兵会社D K本部…（「巻き込まれ親父の撤退」参照）

TYがIYに会ったのは、民兵会社時代…それもF県領地への支部に対する増援派遣が決定された日の本部のブリーフィングルームである。

「アテンション！（傾注！）」

副官の号令でその場に集められた民兵会社の社員達…部隊指揮官のIFの部下達は、一斉に壇上のIFに対して敬礼をした。IFは答礼を返すと、副官は「着席！」と号令をかけ、社員達は隊員として椅子に座る。

「作戦を説明する前に、今回一人あたしの部隊に入ってくる隊員を紹介する…おい、IY」
「はい」

「今回の作戦に通信要員として同行する様、上からの指示で臨時編入されたIYだ」

「IYです。よろしくお願いいたします」

と言って、IYは頭を下げた。

周囲はざわつく…IYの部隊章がSSの部隊章（後方支援部隊）を着けていた。

「誰か…こいつの面倒を見る役は…と、おいTY！」

「はい」

「お前の相方、確か国指定の流行性感冒にかかって長期療養中だな」

「はい」

「だったら、あんたIYの面倒を見て」

「了解しました」

IYがTKの側に行き、

「IY…です。よろしくお願いします」

「（暗いやっちゃな…）」これが、TYがIYに対して抱いた第一印象…

「作戦を説明する！今回は、明後日、F県領地で我が国の外務大臣が隣国C国の大使を伴い、

F県領地での会談が行われる。その席上で外務大臣とC国大使を狙ったテロが起きると言う情報を入手した。F県領地には知つての通り、我が社の支部があるが、支部長が最近代わったばかりなのと、戦力が1分隊しかないので、本部から我が隊が増援されることになった」

IFの話に周囲はざわつく。

「通常ならば、F県領地への移動は鉄道かフェリーを使うが、事は明後日なので、装備を揃えて、当日F県領地に到着するのは不可能なので、今回は特別に正規空軍の輸送機をチャーターした…なので、明日までに装備を整え、夕方までに正規空軍輸送基地まで移動し、翌早朝にそこからF県領地の空港に移動…現地でF県領地の支部の部隊と合流する。以上だ！」

「ハイ！」

○県領地漁港…〔巻き込まれ親父の撤退〕参照

「…ですから、IF隊長にここに来て本部に連絡して支持を仰ぐようにと命令されたって、何度言わせるんですか？…えっ、直ちにF県領地に再度渡ってIF隊長と合流しろと？…はあ、本部命令？あのですねー、そちらの指示…あつ、切られた！」

TYはIFの命令を忠実に守って、本部と連絡を取る事に成功したが、本部の日和見保身内密主義の上層部からは返事をのらりくらりと躲され、挙句には本部からの支持は、F県領地でTY達の連絡を待っているIFの部隊に戻れと言う命令を出され、その先について何も指示が無くて途方に暮れていた。

一緒にこちらに來た通信要員のIYはと言うと、てんで役に立たない。ただ黙っているだけ…何考えてんだか…

「おい、IY」

「はー」

「本部はここ（○県領地から）また海を渡って、向こう（F県領地）に戻って、IF隊長と

合流しろと言ってるよ！」

「そーですか…」

「あんたは、どう思う？」

「私は別に…」

「別にじゃない！ I F隊長の命令に従ってここで本部の指示がでるまで、粘るか、向こうに渡って、I F隊長にこの事報告して、I F隊長に謝るかどうするかを聞いてんの！（なに言ってるんだ、こいつ）」

「…本部は、『I F隊長に合流しろ』ですよ…なら、そちらに従った方がいいと思います」

「あー、そう…じゃそうしようかね（なに考えてんだ！こいつ）」

「…それより、途中で海に投棄するように言われた装備どうします？こつちに上げちゃいましたけど…」

「あー、そうだった！本部がI F隊長にこつちに脱出を指示した時に、そのまま持ち帰れば、本部から装備委棄の責任に問われないと思ったのにー」

「今更、海に捨てる訳にもいかないので、この漁港で保管場所借りて入れておきますか？」

「…そうね、良い考えね。そうしましょ（あー、もう！）」

…あの時、何考えてるか分からなかったけど、結果こうしたことで、I F隊長には完全に嫌われたけど、准尉には褒められたっけ…

再び O 県領地漁港…（巻き込まれ親父の反撃」参照）

「（I Y の鼻歌）」

「あんた、こういう時に限って生き生きしてるわね！」

「そうですか？私はこういうモノいじっているのが楽しくて…」

「後方支援部隊で慣れてるから？（変な娘…）」

「…それも、ありますが、准尉のお役に立てるのが嬉しくて…」

「そっち！セットアップは済んだの？」

「まだです！HY先輩」

「なるべく急いでね…こいつが間に合うかどうかで、作戦が左右される可能性があるのよ！」

「ハイ！（HY先輩…准尉の最初の教え子でわたしの新兵時代の教官の一人ではあるけど…あんな小さな体で、何が准尉に気に入られているんだろう…ひょっとして、准尉ってロリコン（笑）？」

「こつち、終わりました！」

IYが手を上げると、HYは

「じゃ、スマートフォンとドローンとヘッドマウントディスプレイの連携確認！ヨロシ

ク！！」

「はい！」

TYはHYを見ながら「テキパキと指示するなあ…そういえば、IF隊長がHY先輩は会社に居た頃は曹長待遇って言ってたっけ…多分分隊の指揮を執った事があるんだろうな…」と考えていると、

「そこ！手が止まってるわよ！！」

「すみません！（おっと、しっかり見られてる…）」

HYの怒声に慌てて作業を再開するTYに対して、IYは

「HYさん、こちら済みました」

「貸して、チェックするから…次お願い！」

「はっ」

また変な鼻歌を歌いながら、新しいドローンを箱から出すIYを見て、TYは「なんだか、HY先輩の指揮のせいかIYの奴、キビキビ働くなァー…それに表情も明るくなったし…F県領地の赤ずきんちゃん作戦で何か吹っ切れたのかな？」とIYを眺めていると、
「そこ！また手が止まってる！！しっかりしなさい！」

「ハイ！」

…あの時、IYがF県領地に派遣される前とうって変わって生き生きしているのには驚いたなあ…『准尉のお役に立てるのが嬉しい』って、言ってたっけ…あの時には既に准尉の命令を無視して、F件領地に渡る覚悟してたんだろうな…人が変わったと思い出して、TYはニコリと笑った。

●IY嫁入り？

HG達が白山亭に帰って約3か月後…

「いらっしやいませ…あつ、IT隊長！」

白山亭の入り口でIYはITを出迎えた。

「やあ、准尉はいらっしゃるかな？」

「はい、バーカウンターに…」

ITはバーカウンターの席に着くと、HGが

「IT、その後はどうだい？」

「はい、B県領地知事と警察地警のトップにはBSATの現在の3班7名の構成を各班10名に増やす様、予算が付けられました。現在は、正規陸軍特殊部隊と正規海軍海兵隊、更に正規空軍守備隊から候補者が上がっており、それに対抗するため、警察地警のトップから機動隊と帝都のシークレットサービスから人を入れるように言われて頭が痛いです。更に

帝都の本家（TSAT…帝都特殊急襲部隊）から、教育・訓練マニュアルの提供を打診されました」

「へえー」

「これも、准尉のお陰です」

「せいぜい、高く売り込んでくれ…それで本家を見返してくれ！」

「相変わらずですね…」

と言つて、ITは笑った。

「隊員達は元気にやってるかね？」

「はい、皆現元気で日々訓練に励んでいます。その後何度か出動をしました。時折、准尉や准尉の娘達を思い出して、話をする事があります…特に訓練で行ってきたことと現場での事態が異なる場合は、准尉やその娘達を思い出してその場でコミュニケーションを取って修正して対応する事を実践しています」

「それは、手ごわくなったな…また、ウチの娘共と手合わせしてみたいな」

「隊員達も、准尉の娘達とまた任務や訓練をしたいと言っております」

「そうだな、ウチの娘共の定期訓練にはもってこいだが、任務となると今度は碇屋として仕事を受注させてもらう事になるな…」

「はは、ちゃっかりしておられる」

と言つて、ITは嬉しそうに笑った。

「…そういえば、あれから何人かこの店に来たな」

「はい、このコーヒーが美味しいと言っていましたし、女性の隊員達は女給姿もしてみたいと言っていました」

「そうかそうか…、じゃ、港町署と水上署の方達と一緒にバイトしてくれると、ありがたいな」

「はは、そうですね。准尉の所なら安心して預けられます…そう言えば、准尉で思い出しましたが、なんか、陰では自分の事を准尉に習って隊長ではなく“大将”とか呼んでいるようです…本家の准尉にはお恥ずかしい事ですが」

「いいじゃないか、それだけ信頼されている証拠だ」

「ハハハ」

HGとITの雑談が進む、その間にHYとTYとIYが話の輪に入る。

「最近海外では、短機関銃と突撃銃の中間の個人防衛兵器PDWと呼ばれる個人携帯の銃器が流行り始めて、我が部隊でも取り入れるべく検討している所です」

「PDWについては、俺も知っている。自動小銃や突撃銃より取り回しがよさそうだし、拳銃弾を使用する短機関銃より威力のある弾丸を使うので、エージェント任務に使えるそうだと考えている」

「それなら、話が早い。こちらで今各社サンプルを借りてトライアルしているので、試してみませんか？」

「いいねー、是非に」

等と話している内、ITが急に改まって、

「准尉にお願いがあります」

「お金ならないぞ」

「それは分かっております。それではなくて…」

「じゃなんだ？」

「准尉、IYを是非我がBSATのスナイパー要員として貰い受けたい」

と言って、ITがHGに頭を下げた。それを聞いて、IYは驚いた。

「唐突だね…」

とH Gが静かに言うと、

「あらー、I Y良かったわねー嫁入り先（次の就職先の事）が決まって！」

とH Yが意地悪く言うと、I Yは毅然と、

「私は、准尉の元を出て行く気はありません！」

と言った。

「I Y無理しなくてもいいのよー」

とT Yも嫉妬して言うと、I Yはムキになって、

「私は、准尉にこの身を捧げました」

と、とんでもないことを口にして、赤面した。

「あらあら…准尉は女泣かせであります事」

とT Tはシレつと言った。

「…と言う事だ、I Yが嫌がっているんで、嫁には行かせられんよ」

「…そうですか、残念です」

●エピソード

「おい、H G。あんた半年も店を休んで何してた？折角わざわざ帝都から飲みに来てやっているのに！何も教えてくれないから、来るたびに『本日閉店』の看板を見て、何度歯噛みした事か…」

夜のP u b営業でI FがH Gに絡む。

「昼間の営業は、ちゃんとやっていたぞ…T Tが切り盛りして」

「昼間なんて知らないわよ！あたしは夜のP u bの事言ってるの！」

「それは、悪かったね。実は警察に隔離されていた」

「えっ？あんた何やったの？」

とIFは驚いた。

「おいおい、俺は逮捕されて留置されていた訳じゃないぞ。機動隊官舎で教官のアルバイトをしていた」

「あー、びっくりした。脅かさないでよ」

とIFが安堵の声で言うと、

「へー、F子ちゃんも俺の事心配してくれるんだ」

とHGが茶化した。

「F子ちゃん言うな！そりゃ、警察に引っ張られたというのなら、あたしだって心配するわよ」

と真顔でIFが答えると、

「引っ張られたんじゃない。隔離されたと言っている」

とHGが真顔で応じると、

「同じ様なもんじゃない！…で、これで前科何犯？」

とニヤケ顔で言うIFに

「オイオイ」

「ま、こうして帝都からわざわざ飲みに来てやっているんだから、今まで休んでいた分、一杯くらいいい酒出さないよ！もちろん驕りで」

と空になったグラスをHGに差し出した。

「ハイハイ…じゃ、F子ちゃんの好きなバーボンのシングルバレルのいい奴をね」

と言って、後ろの棚からボトルを取り出し、IFに見せると、IFは喜んで

「やったね！」

と言って微笑んだ。

I FがH Gの出すバーボンの水割りを片手にグラスの中の氷を回して

「H G。あんたこの店のホームページとかSNSのアカウント作りなさいよ。そうすれば。あたしが無駄足踏まずに済むから…」

「そうだね」

店内で女給姿のI Yがトレイを持って歩いているのを見ながら、ふとH Gが

「ところで、F子ちゃんの部下達どう？元気でやってる？」

と、半年以上前のフェリー埠頭の事件で一緒に行動したI Fの部下達を思い出した様に訊ねると、

「うーん、相変わらず入れ替わり激しいわね…新しい子入る度に訓練し直したから、習得が間に合わずに現場（戦場）の戦闘で手違いが起きたり、折角訓練したら辞めちゃうとかね…」

「大変だねー」

とH Gがしみじみ言うと、I FはH Gを睨んで

「…そう、大変よ…だから帝都からわざわざ電車賃払ってわざわざここまで、飲みに来てやってんのよ」

と不満顔で答えた。

「それはありがたいね。やけ酒飲んで絡まれる方は溜まったもんじゃないけど」

H Gが茶化す様に言うと、

「うるせー、いままで無駄足踏まされても、懲りずに毎日様子を見に来てやったんだ！愚痴ぐらい聞きなさい」

と、持っていたグラスを音をたてて置いた。I Fの『毎日』と言う言葉にH Gが驚き

「えっ？毎晩来てたの？」

と聞き返すと、

「そーよ、毎日…あんたに愚痴を言い…わざわざ帝都から…」

と言って、I Fはバーカウンターにため息をついて、もたれかかった。

「F子ちゃんー、酔ってるー？」

と、H Gがわざとらしく声をかけると、I Fはもたれかかっているバーカウンターから顔だけ起こして、

「まだそんなに飲んでないし、酔ってません！」

と紅潮した顔で返事した…返事の割には、酔って目は据わっていた。

「会話が、一部ループしてるよー」

「ここで、酔いつぶれても、あんたの所（母屋）に泊めて貰えるから…」

と安心した顔で言うと、I Fはバーカウンターに頬杖をついてH Gを見つめた。

「それが、本音かい！（フェリー埠頭の事件の後の打ち上げで、泊めてやったら味をしめたな…）」

「巻き込まれ親父の狙撃 Ⅱ完Ⅱ」